令和三年度　日本史推進委員会の神奈川県立歴史博物館との連携について

鎌倉学園高校　**風間　洋**

日本史推進委員会では、神奈川県立歴史博物館の学芸員の方を交えて高校の歴史教育における博物館の有効活用についての懇談会を昨年から実施してきた。新しく導入される『歴史総合』・『日本史探究』では、生徒に提示する授業テーマに沿った「適切な資料」の準備や選択が今以上に重要であることは、周知のとおりである。当然地域資料を豊富に所蔵し、専門知識を持つ学芸員のいる地元博物館との連携は、いよいよ重要になってくるといえよう。こうした問題意識のもとで、今年度は以下の様に3回の博学合同例会を実施することができた。

2021年7月7日(水)、丹治雄一学芸部長ら4名の学芸員を県立希望ヶ丘高校にお招きし、桐生海正教諭(足柄高校)と渡邊浩貴学芸員より報告をしていただいた。桐生報告「校外学習で深められる地域史学習」は、遠足行事の事前学習として勤務校周辺の地名や寺院、城跡などを調べさせることで、生徒に身近な中世の痕跡に気付かせる事例を紹介した(桐生報告の詳細は本誌参照)。渡辺報告「地名・聞き書き・景観に探る中世武士本拠」は、現地踏査や聞き取りを活用し、西遷御家人内田氏が石見国長野荘横田村に形成した景観復元を試みものである。奇しくも両報告は中世を題材とし、少ない文献史料の克服を試みた報告であった。両報告後の質疑応答では、地域の中世を学ぶ授業教材として古地図や地名の有効性とその限界について、活発な討論がなされた。渡邊報告は、「西遷御家人内田氏の本拠景観と高津川流域」(『中世武家領主の世界』所収　勉誠出版 2021)として成果が公開されている。

2021年10月27日(水)には、県立歴史博物館の講堂をお借りして、大磯高校の井上渚沙教諭(大磯高校)「博学連携と探究学習の実践」の報告があった。井上報告は総合学習の一環である神奈川地域史のテーマ学習の実践報告である。各校でもこうした試みは実践されていることと思われるが、テーマ設定から調査方法、レポート作成まで一貫して県立歴史博物館の学芸員の指導を受けながら進めた点に大きな特色がある。コロナ禍の行動制限もあって今年度は実施できなかったが、学園祭などで成果を展示・発表するところまで実践する予定であるという(井上報告の詳細は本誌参照)。学芸員もこうした高校生への課題学習の一貫した指導は初めてで、現在の高校の歴史教育が博物館に何を求めているか認識が深まったという。次年度以降も運営方法を改善しながら継続されるということなので、本委員会でも支援していきたいと思っている。報告後は開催中の秋季特別展「早雲寺」を観覧し、展示を担当された渡邉学芸員と展示資料の教材化の可能性などを懇談することができた。

2022年3月2日(水)には県立歴史博物館にて本田六朗教諭(横浜緑園高校)の「神奈川県鳥瞰図を通して考える昭和初期」と題する報告が行われた。昭和初期の神奈川県域の時代背景を考える資料として、館所蔵1932年発行の吉田初三郎作「神奈川縣鳥瞰図」を教材として、描かれている内容の分析や現在との比較にはじまり、本図が描かれた意図、当時の世相などを県内高校生に読み取ってもらうポイントをまとめたものである。本報告は、武田周一郎学芸員から本田教諭が神奈川の生徒向け教材としての提案・助言をうけて構想したもので、「博学連携による地域資料の教材化」という本会の目的の一つが実践されたという意味で非常に意義深いものであった。報告後、鳥瞰図を拝見する機会をいただいたが、長さ4m余の実物の迫力は圧巻で、精密に書き込まれた地名や建造物に各教員も魅入ってしまっていた。懇談会では、来年度もこうした館所蔵資料を教員・学芸員の協業で教材化を継続し、実践例を重ねていくことが有効である点が確認された。コロナ禍の公務に多忙な中、会場提供や特別展・資料の観覧などに御便宜をはかっていただいた学芸員の先生方に感謝し、経過報告を終えたい。